

天平十三年の書持と家持との贈答について (三)

—その表現について—

村田 右富実

一 はじめに

前々稿、前稿^①では、天平十三年（七四一）四月に書持と家持との間で交わされた贈答の本文校訂について述べた。論証の詳細は各論に譲り、結論として、当該贈答の本文及び訳文は以下のようになる^②と考へる。なお、通説と異なる点には傍線を付した。

本文

詠^③霍公鳥^④歌二首

多知婆奈波 常花尔毛歟 保登等藝須 周無等来鳴者 伎可

奴日奈家牟

珠尔奴久 安布知乎宅尔 宇惠多良婆 夜麻霍公鳥 可礼受

許武可聞

右四月二日大伴宿祢書持從^⑤奈良宅^⑥贈^⑦兄家持^⑧

和歌三首

橙橘初咲 霍鳥飜嚶

對^⑨此時候^⑩ 詎不^⑪暢^⑫志

因作^⑬三首短歌^⑭ 以散^⑮鬱結之緒^⑯耳

安之比奇能 山邊尔乎礼婆 保登等藝須 木際多知久吉 奈

可奴日波奈之

保登等藝須 奈尔乃情曾 多知花乃 多麻奴久月等^⑰ 来鳴登

餘牟流

保登等藝須 安不知能枝尔 由吉底居者 花波知良牟奈 珠

登見流麻泥

右四月三日内舍人大伴宿祢家持從^⑱久邇京^⑲報^⑳送弟書

持^㉑

訳文

霍公鳥を詠む歌二首

橘は 常花にもが ほととぎす 住むと来鳴かば 聞かぬ日

なけむ (17・三九〇九)

玉に貫く 棟を家に 植ゑたらば 山ほととぎす 離れず来
むかも (17・三九一〇)

右、四月二日に大伴宿祢書持、奈良の宅より兄家持に
贈る。

和歌三首

橙橋初めて咲き、霍鳥雛り嚶く。

この時候に対ひ、詎志を暢べざらめや。

因りて三首の短歌を作り、以て鬱結の緒を散らさまくのみ。

あしひきの 山辺に居れば ほととぎす 木の間立ち潜き

鳴かぬ日はなし (17・三九一一)

ほととぎす 何の心そ 橘の 玉貫く月と 来鳴きとよむる

(17・三九一二)

ほととぎす 棟の枝に 行きて居ば 花は散らむな 玉と見
るまで (17・三九一三)

右、四月三日に内舎人大伴宿祢家持、久迩の京より弟
書持に報へ送る。

本論は、前稿に続き、当該贈答の表現について述べるものであ
る。前稿にも記した通り、当該五首の贈答性についての確な指摘
をしたのは清水「一九九〇」である。

書持の贈歌二首に対して、家持の報送歌は三首であるが、家
持の第一首(三九一一)は、中略総括的な和歌である。

そして、以下の二首は、それぞれ書持の各首に対応する和歌
と見るべきものである。(清水「一九九〇」―傍線は引用者。
以下同。)

これを簡潔に記すと以下の通り。

家持和歌第一首(三九一一)

|| 総括的

書持贈歌第一首(三九〇九) ↑ 家持和歌第二首(三九一二)

書持贈歌第二首(三九一〇) ↑ 家持和歌第三首(三九一三)

しかし、当該贈答は日本語韻文のやりとりだけではなく、家持
による序文も付されているうえ、家持和歌第二首の訓も清水論文
と本稿とは違う。この点もあわせて、あらためて当該贈答につ
いて考える必要があるだろう。

一 書持贈歌

贈歌第一首は、以下の通り。

橘は 常花にもが ほととぎす 住むと来鳴かば 聞かぬ日
なけむ (17・三九〇九)

この歌は、橘が「常花」であることを願ひ、そうであれば、ほ
ととぎすの常住が実現し、その声を聞かない日はないだろうと歌
う。歌の前提としてあるのは、橘は「常花」ではないこと、ま
た、橘が咲かなければほととぎすの訪れもないという認識であ
る。多くの先行研究が指摘するように、書持がいる「奈良宅」で

は、橘は咲いておらず、ほととぎすも鳴いていないのだろう。贈歌第一首は、橘が「常花」であることを仮想し、まだ見ぬほととぎすの常住を願う歌である。

贈歌第二首、

玉に貫く 棟を家に 植ゑたらば 山ほととぎす 離れず来むかも (17・三九一〇)

は、「棟」について多くの論がある。鈴木「二九八八」はここに「逢ふ」を読み取り、鉄野「一九九七」、花井「二〇〇三」、松田「二〇一六」も従う。この点は、

我妹子に 棟の花は 散り過ぎず 今咲けること ありこせぬかも (10・一九七三)

を見ても首肯できよう。ただし、『万葉集』に「棟」が四例しかない状況にあつて、「玉に貫く棟」が珍しいものかどうかの判断は下すべきではあるまい。表1は、『万葉集』中の「貫く」と歌われる対象物の用例数の一覧である。「梶」、「竹玉」なども参考のために記している。これを見る限り、橘が圧倒的に多く、過

表 1

対象物	用例数
橘	17
あやめ草	8
声	5
棟	1
卯花	1
小計	32
(梶)	22
(竹玉)	5
(緒)	4
(露)	3
(不明)	1
(矢)	1
小計	36
総計	68

半数を占めている。しかし、上段の三十二例中家持が二十一例を占める。家持歌を除くと表2となる。橘の優位性は残るものの、「棟」は卯の花やあやめ草などとともにあり、そこに特異性は見出せない。これは表の下端の括弧で記した用例が家持を除いても大きな偏りが見られないことも対照的である。しかし、こうした偏りが発生するのは、何も「玉に(を)貫く」に限ったことではない。家持歌が全体の二割を占める『万葉集』自体の持つ偏差であり、『万葉集』が奈良時代の韻文の一部でしかない以上、やむを得ないことである。逆に、

ほととぎす いたくな鳴きそ 汝が声を 五月の玉に あへ貫くまでに (8・一四六五)

ほととぎす 汝が初声は 我にこせ 五月の玉に 交へて貫かむ (10・一九三九)

のように、ほととぎすの声を玉に貫くという極めて修辭的な表現が成り立っていることを考えれば、その背後には様々な植物を玉に貫いていたと理解する方が妥当なのではないだろうか。

表 2

対象物	用例数
橘	6
声	2
棟	1
あやめ草	1
卯花	1
小計	11
(梶)	19
(竹玉)	5
(緒)	4
(露)	2
(不明)	1
(矢)	1
小計	32
総計	43

また、多くの注釈書の現代語訳が「棟を家に植えたならば」となっているが、「植ゑば」ではなく、「植ゑたらば」である点に注意が必要である。ここは植ゑるという行為を詠んでいるのではなく、『新大系』²が「植ゑてあつたら」と訳出しているのが正しい。現在自邸に存在しない棟を想像し、棟が存在していれば山ほととぎすの常住が期待できるというのである。事態の解決を図り自ら植ゑようとする歌ではなく、棟のない現況を嘆いていると理解すべきであろう。贈歌第二首は、自宅に存在しない棟の存在を仮想し、「離れず来むかも」と、こちらもほととぎすの常住を願う歌である。

このように見てくると、書持の贈歌は、二首ともに現実にはあり得ないことを承知の上で提示し、それが解決されることよってほととぎすの常住が果たされると歌っていることになる。現況の是正は果たされないという諦念でもあり、寂しさの裏返しを表現といってもよいはずである。

しかし、実際にはその表現性にも関わらず、この二首から諦念や寂しさは感じられない。それは当該二首が四月二日詠であることに起因しよう。三月尽の翌々日にほととぎすが鳴いていないのは、それほど不思議なことではあるまい。それをことさら大袈裟に表現しているのである。それは前掲鉄野論文が当該二首に詠物歌のありようを見出したことにも通じる。当該二首は、夏四月を迎え恭仁京にいる家持の起居を問う、いわば平信として理解すべ

きであろう。

三 家持和歌（一）——背景と時代状況——

書持の二首に対して、家持の和歌三首は、題詞、序文、歌という三部からなる。集中にこのように、題詞＋序文＋歌の形式をとるものは、次に掲げるように十九例ある。³

- ① 報凶問歌（5・七九三）
- ② 日本挽歌（5・七九四～七九九）*序文と題詞とは逆
- ③ 令反或情歌（5・八〇〇～八〇一）
- ④ 子等を思ふ歌（5・八〇二～八〇三）
- ⑤ 哀世間難住歌一首（5・八〇四～八〇五）
- ⑥ 歌詞兩首（5・八〇六～八〇七）
- ⑦ 梧桐日本琴の歌（5・八一〇～八一二）
- ⑧ 梅花歌三十二首（5・八一五～八四六）〔員外思故郷歌〕は除いた）
- ⑨ 松浦河に遊ぶ序（5・八五三～八六三）
- ⑩ 熊凝哀悼歌（5・八八六～八九一）
- ⑪ 天平八年十二月十二日、葛井広成宅の宴席歌（6・一〇一～一〇一二）
- ⑫ 天平十九年二月二十九日、家持、池主に贈る悲歌（17・三九六五～三九六六）
- ⑬ 天平十九年三月三日、家持、池主に更に贈る歌（17・三

九六九～三九七二)

⑭ 天平十九年三月四日、七言晚春三日遊覧一首(17・三九七三前の漢詩)

⑮ 天平二十年三月十五日、池主から贈られて来た歌(18・四〇七三～四〇七五)

⑯ 天平感宝元年五月十五日、尾張少昨を教諭する歌(18・四一〇六～四一〇九)

⑰ 天平勝宝元年十一月十二日、池主から贈られて来た戯歌(18・四二二八～四二三一)

⑱ 天平勝宝元年十二月十五日、池主から更に贈られて来た歌(18・四一三二～四一三三)

⑲ 天平勝宝三年七月十七日、久米朝臣廣繩の館での悲別歌(19・四二四八～四二四九)

これらの多くは、書簡によって知己に送られたものである。この点が明瞭でないものは⑪(6・一〇一～一〇二)、⑫(18・四一〇六～四一〇九)の二例のみであり、当該家持和歌も書持に送られている。そして、ここに掲げた卷十七以降の用例は当該贈答よりも後のものであり、当該歌以前の用例は、卷五に極端に偏る。卷五の前半部は大宰府にあった大伴旅人を中心とした書簡集であることは以前述べたことがあるが、家持和歌は父のそうした営為を襲っている。勿論、現存しない歌々に類例が多く存在していた可能性は否めないが、家持が卷五を読んでいたこと

は、作者についての議論があるものの、「大宰の時の梅花に追和する新しき歌六首」(17・三九〇一題詞)に明らかである。

また、恭仁京と平城京との距離は、大宰府と平城京とのそれとは比べるべくもないけれども、

都路を 遠みか妹が このころは うけひて寝れど 夢に見
え来ぬ(4・七六七 大伴家持)

故郷は 遠くもあらず 一重山 越ゆるがからに 思ひそ我がせし(6・一〇三八 高丘河内)

といった恭仁京時代の歌から、平城京との心的懸隔を想定させる。東国行幸から恭仁京遷都という慌ただしさによってもたらされた不安定性の終焉——それが平城京遷都なのか、恭仁京への永続的な遷都なのかも含めて——は、当時の人々にとっては全く未知の状態であったことを勘案すれば、長くても五年と踏んで赴任した旅人の大宰府下向以上に、不安だったろう。前掲鈴木論文も述べるように、家持和歌が大宰府における父・旅人の書簡のありようを襲っていることは認めてもよいだろう。

ただし、北山「一九七一」が、

広嗣の叛乱、伊勢行幸、それにつぐ遷都は、若い内舎人にとつては、重大な事件として、外からかれに迫ったにはちがいないが、家持は、時の流れにただおし流されて忙しく動いた。しかし、政局への憂慮といえないにしても、晴れやらぬ気分がかれの胸裡にひろがっていた。

と述べるような、大状況からの把握は慎むべきであろう。まだ五位にすらなっていない家持が、内舎人ではあっても当時の政治状況をどこまで正確に見抜けたかは不明である。

一方、伊藤「一九六九」は、

この家持に訪れた第二の転機、それが、天平の争乱に迷わされつつ本郷を離れ、草深い久迩の都に転住したことであった。「鬱結の緒」とは、青年の何知れぬ詩心の氾濫であっただろう。ただし、その歌は、詞が先走って、後年の絶唱のごとくではない。観念・思考の先走りというべきか。

と、個人的な人生から論じる。しかし、どこまでいっても「何知れぬ詩心の氾濫」の内実は勿論、その有無を知ることさえ不可能である。どちらも、研究の側が作り上げた家持像を表現に再適用している過ぎない。あらためて、当時の貴族たちに共有可能な状況をみてみたい。

当該贈答は左注にあるように天平十三年（七四一）四月二日、三日のやりとりである。『続日本紀』には、この年の元旦には「宮垣」が未完成であった記事が載り、二月に制作された境部老麻呂の恭仁京讃歌にはまだ架橋されていない状況が詠み込まれている⁽⁶⁾。三月九日によく平城京の兵器が運び込まれ、閏三月十五日に、以下の詔勅が発せられた。

留守の従三位大養徳国守大野朝臣東人、兵部卿正四位下藤原朝臣豊成らに詔して曰はく、「今より以後、五位以上は、意

に任せて平城に住むことを得じ。如し事の故有りて退り帰るべくは、官符を賜はりて、然して後に聴せ。其れ、平城に見在る者は、今日の内を限りて、悉く皆催し発て。自余りの、他所に散在れたる者も亦、急ぎ追ふべし」とのたまふ。（天平十三年（七四一）閏三月十五日）

そして、太上天皇（元正）の入京は、当該贈答の約三ヶ月後の七月十日、恭仁京の架橋記事の初出は同年十月十六日条である。

元正上皇はいまだ平城京にあり、泉川に橋のない状況下、恭仁京への強制移住の詔勅が下る。そうした中、当該贈答は成された。この詔勅はあきらかに恭仁京の永続性を志向し、平城京への還都は遠のく。大伴家に関していえば、この時五位以上で死亡記事を持たない人は次の通り。ただ、備考欄にも記したように、逝去している者もいるため、実際には、傍線を引いた道足、牛養、兄麻呂、古慈悲の四人が五位以上だったと考えられる。

名前	五位の初出	七四一年の位階	その年	備考
大沼田	七〇五年	従五位下？	七〇五年	既に卒去？
男人	七〇三年	従四位下？	七一七年	既に卒去？
道足	七〇四年	正四位下	七二九年	七四一年卒去？ 〔公卿補任〕
宿奈麻呂	七〇八年	従四位下？	七二四年	既に卒去？
牛養	七〇九年	従四位下	七三八年	七四三年に従四位下

山守	七十四年	正五位上	七一九年	?
祖父麻呂	七十六年	從四位下	七三一年	?
首	七八年	從五位上	七二九年	?
兄麻呂	七二一年	正五位下	七四一年	七四六年に從四位下
古慈悲	七三九年	從五位上	七四〇年	七四二年に正五位下
(家持)	七四五年	(内舍人)	?	

他に、外位を含めてよいのであれば、首麻呂、御助、小室、麻呂、老人、三中、百代、犬養が加わる。外位の人々はともかく、少なく見積もっても大伴氏には四人の強制移住該当者がいることになる。恭仁京にいる家持は大伴氏の若者として多忙を極めたことだろう。なお、実際に大伴氏の面々が移住したか否かはさほど問題ではない。詔勅からわずか半月、その詔勅の実効性の有無にかかわらず、家持のみならず、恭仁京にいる人々にとって、この頃は災厄にも似た状況だったろう。そうした中、当該贈答が交わされた。以下、家持和歌について順に述べてゆく。

四 家持和歌(二) — 題詞と序文 —

「和歌三首」という題詞は、当該三首の読みを規定する。橋本「一九七四」によれば、「和歌」は「報歌」と違い、贈歌に寄り添うという。当該贈答に適用すれば、書簡による返事そのものが贈られて来た歌に寄り添う性質があると考えるべきだろう。そもそ

も当該贈答には対立するような場面の想定は難しい。ただし、芳賀「一九九一」が述べるように、「和歌」と「報歌」との差異は前掲橋本論文が述べるほど明確ではないだろう。しかし、それでも当該贈答に何らかの対立を見出すべきではあるまい。序文について述べる前にこの点を確認しておく。

序文は、「霍公鳥」の「公」の文字を略して四字句に揃え(前々稿参照)、四字の対句を志向する。この序文によれば、書持贈歌が届いた頃、恭仁京は「橙橘初めて咲く」「霍鳥繚り嚶く」状況であったことが知られる。勿論、文学作品である以上、こうした記述も虚構の産物である可能性を否定できないが、弟・書持からの「平城京ではまだ咲いていないし、鳴いていない」という贈歌への応答であることを考えれば、あえて疑う必要もないだろう。つまり、つい数ヶ月前まで都であった平城京では橘の花もほととぎすの声もまだ訪れていないという状況に対して、新都恭仁京ではその両方が実現していることが記されているのである。しかし、そうした、いわば理想的な状況であるにもかかわらず、家持は「この時候に對ひ、詎志を暢べざらめや。」(鬱結の緒を散らさまくのみ)(以下、上の二点に記された心情を「鬱結」とまとめ記す)と嘆く。この点について、前掲鉄野論文は、

要するに、「鬱(鬱)結」とは、孤独感と閉塞感の謂である。それは、周囲の自然が、開放されたものであるほど、際立つだろう。

とまとめるが、その孤独感や閉塞感は、最終的には生身の家持の問題に収斂してしまうだろう。たとえば、前掲鈴木論文が、この「鬱結」を平城京に残っている坂上大嬢への恋慕と捉えるのはその典型である。この点を「鬱結」の内実から積極的に排除する必要はないだろうが、先に述べた当時の状況も視野に入れるべきではあるまいか。工事中の恭仁京と迫りつつある強制移住こそが、恭仁京にいる官人たちに共通する「鬱結」の最大要因だったであろう。その中に、どれほどの個人的な「鬱結」が配分されているかは知りようがない。重要なのは、この題詞と序文は、書持贈歌に寄り添いつつも、「和歌三首」を「暢志」、「散鬱結之緒」の歌として読むことを書持に要求している点である。以下、家持和歌について論を進める。

五 家持和歌 (三) — 第一首 —

和歌第一首、

あしひきの 山辺に居れば ほととぎす 木の間立ち潜き

鳴かぬ日はなし (17・三九一一)

は、「山辺」でほととぎすが鳴いていることを歌う。いうまでもなく、結句の「鳴かぬ日はなし」は書持贈歌第一首の「聞かぬ日なけむ」を受けている。そして、やはり恭仁京ではすでにほととぎすが鳴いている。序文の「橙橘初めて咲き」とともに、書持贈歌第一首とは全く違う状況を歌っているとよい。

しかも、「くぬ(打ち消し)+日+なし」(十一例—当該歌を除く)から、願望や仮定表現を除くと、いずれもその日が既に何日も続いている状況を示していることがわかる。

なでしこが その花にもが 朝な朝な 手に取り持ちて 恋ひぬ日なけむ (3・四〇八) 願望

佐保山に たなびく霞 見るごとに 妹を思ひ出で 泣かぬ日はなし (3・四七三)

春日山 朝立つ雲の 居ぬ日なく 見まくの欲しき 君にもあるかも (4・五八四) 願望

我がやどに もみつかへるて 見るごとに 妹をかけつつ 恋ひぬ日はなし (8・一六二三)

夜並べて 君を来ませと ちはやぶる 神の社を 祈まぬ日はなし (11・二六六〇)

我妹子に またも逢はむと ちはやぶる 神の社を 祈まぬ日はなし (11・二六六二)

草枕 旅にし居れば 刈り薦の 乱れて妹に 恋ひぬ日はなし (12・三一七六)

住吉の 岸に向かへる 淡路島 あはれと君を 言はぬ日はなし (12・三一九七)

韓亭 能許の浦波 立たぬ日は あれども家に 恋ひぬ日はなし (15・三六七〇)

橘は 常花にもが ほととぎす 住むと来鳴かば 聞かぬ日

なけむ(17・三九〇九) 仮定

かくばかり 恋しくしあらば まそ鏡 見ぬ日時なく あら

ましものを(19・四二二二) 仮定

「橙橘」が咲き始めた恭仁京では、以前よりほととぎすの声が聞こえていた。この贈答の時点に適用してよいかは疑問もあるが、ほととぎすをこよなく愛したといわれる家持から見れば、それは好ましい状況だったはずである。これは、序文の「鬱結」とうちあわなないように見えるが、当該歌のほととぎすはあくまでも「山辺」で聞くほととぎすである。集中に「山(の)辺」は、三十三例を数えるが、

春日野の 山辺の道を 恐りなく 通ひし君が 見えぬころ
かも(4・五一八)

玉梓の 妹は玉かも あしひきの 清き山辺に 撒けば散り
ぬる(7・一四一五)

山の辺に い行く狼雄は 多かれど 山にも野にも さ雄鹿
鳴くも(10・二二四七)

く雲離れ 遠き国辺の 露霜の 寒き山辺に 宿りせるらむ
(15・三六九一)

のように、人里を離れた空間や、墓所の用例が見える。勿論、家持自身が自宅のある佐保を、

卯の花も いまだ咲かねば ほととぎす 佐保の山辺に 来

鳴きとよもす(8・一四七七)

と歌った例もあるが、これは平城京内での山辺であり、人里離れたといった意は認められない。そして、恭仁京時代の家持の「山(の)辺」を見ると、

ひさかたの 雨の降る日を ただひとり 山辺に居れば い
ぶせかりけり(4・七六九)

山彦の 相とよむまで つま恋に 鹿鳴く山辺に ひとりの
みして(8・一六〇二)

あしひきの 山辺に居りて 秋風の 日に異に吹けば 妹を
しそ思ふ(8・一六三二)

と、恭仁京での一人暮らしを嘆く歌に集中する。中には、天平十六年(七四四)の安積皇子挽歌の、

く大日本 久邇の都は うちなびく 春さりぬれば 山辺に
は 花咲きををり 川瀬には 鮎子さ走り(3・四七五)

もあるが、この部分は安積皇子薨去の時期を示しており、単なる恭仁京讚美として理解できるわけではない。仮にこの歌を例外としても、前掲鈴木論文も指摘するように家持にとって恭仁京は「山辺」だったのだろう。

平城京ならぬ「山辺」では、ほととぎすがしばらく前からさえずり、「橙橘」が咲いているのである。前掲清水論文はこれを総括的に捉えた。それ自体を否定する必要はないけれど、書持贈歌第一首の「鳴かぬ日なけむ」との違いを際立たせている点を見逃してはなるまい。

和歌第一首は、平城京とは異なる恭仁京の現況を知らせるとともに、例えそれが理想的な景であつたとしても、所詮「山辺」の情景でしかないことを歌っているものであつた。

六 家持和歌（四）——第二首——

和歌第二首、

ほととぎす 何の心そ 橘の 玉貫く月と 来鳴きとよむる
(17・三九一二)

は、前稿に記したように、四月であるにも関わらず橘の玉貫く月として鳴き立てるほととぎすに対する難詰である。やはり、和歌第一首で構築された景は、決して理想的なものではなかつた。序文において示された「橙橘」の開花は時期尚早であり、ほととぎすの声は季節外れだったのである。勿論、根底にあるのは「橙橘」やほととぎすに対する愛情であろうが、いいがかりとさえ思える当該歌の難詰は、序文に記された「鬱結の緒を散らさまくのみ」と呼応しよう。

また、書持贈歌第一首の「橘」を受けるだけではなく、「住むと来鳴かば」という仮定を「玉貫く月と 来鳴きとよむる」という現実で返す。それは、「常花にもが」を否定しているようにさえ読めてしまう。

家持和歌の第一首、第二首は、ともに書持贈歌第一首を受けている。書持歌の仮定条件を確定条件として歌い直しているといっ

てもよい。そして、二首ともに恭仁京の現実に基づき、「鬱結」を散らす歌として理解できる。序文の枠組みから外れていない。この点において前掲清水論文の把握は若干の変更が必要になるう。

七 家持和歌（五）——第三首——

最後の和歌第三首、

ほととぎす 棟の枝に 行きて居ば 花は散らむな 玉と見
るまで (17・三九一三)

は、書持贈歌第二首と対応する。書持歌は自宅に「棟」のあることを想定したが、この歌は、それを既定のこととして、そのうえにもう一つ仮定条件を重ねる。そして、その枝にほととぎすが行けば花は玉のように散るだろうと歌う。

この歌について『窪田評釈』は「その美観を心に置いてのもの」とするが、散ることを美とする歌はほとんど見られない。集中に「花」と「散る」とが共起する歌は一〇九首あるものの、多くは、

梅の花 散らまく惜しみ 我が園の 竹の林に うぐひす鳴
くも (5・八二四)

うぐひすの 待ちかてにせし 梅が花 散らずありこそ 思
ふ児がため (5・八四五)

残りたる 雪に交じれる 梅の花 早く散りそ 雪は消ぬ

とも(5・八四九)

足代過ぎて 糸鹿の山の 桜花 散らずもあらなむ 帰り来るまで(7・一二二二)

霞立つ 春日の里の 梅の花 山のあらしに 散りこすなゆめ(8・一四三七)

五月の 花橘を 君がため 玉にこそ貴け 散らまく惜しみ(8・一五〇二)

我が行きは 七日は過ぎじ 龍田彦 ゆめこの花を 風にな散らし(9・一七四八)

春雨は いたくな降りそ 桜花 いまだ見なくに 散らまく惜しも(10・一八七〇)

春されば 散らまく惜しき 梅の花 しましは咲かず 含みてもがも(10・一八七二)

梅の花 我は散らさじ あをによし 奈良なる人も 来つつ見るがね(10・一九〇六)

卯の花の 散らまく惜しみ ほととぎす 野に出で山に入り来鳴きとよもす(10・一九五七)

秋風は とくとく吹き来 萩の花 散らまく惜しみ 競ひ立たむ見む(10・二一〇八)

我がやどに 咲けるなでしこ 賂はせむ ゆめ花散るないやをちに咲け(20・四四四六)

のように、散らずにあることを理想とする歌々である。この点

は、「散らまく惜し」を含む歌が二十例にも及ぶ点からも明らかである。やはり、花が散ることへの興趣を歌うものは少ない。旅人の、

我が園に 梅の花散る ひさかたの 天より雪の 流れ来るかも(5・八二二)

は有名だが、他には、
誰が園の 梅の花そも ひさかたの 清き月夜に こだ散り来る(10・二三二五)

み園生の 百木の梅の 散る花し 天に飛び上がり 雪と降りけむ(17・三九〇六)

くらいしか見当たらない⁹⁾。しかも、17・三九〇六番歌は旅人歌の直接の影響下にあることはまちがいない、当該和歌第三首をそのまま落花を讚美した歌と理解することを躊躇させる。

そして、集中には、次に掲げるような歌々が存在する。

我がやどに 花橘を ほととぎす 来鳴かず地に 散らしてむとか(8・一四八六)

我がやどに 花橘を ほととぎす 来鳴きとよめて 本に散らしつ(8・一四九三)

うれたたきや 醜ほととぎす 暁の うら悲しきに 追へど追へど なほし来鳴きて いたづらに 地に散らさば すべ

をなみ 攀ちて手折りつ 見ませ我妹子(8・一五〇七)

妹が見て 後も鳴かなむ ほととぎす 花橘を 地に散らし

つ (8・一五〇九)

うぐひすの 卵の中に ほととぎす ひとり生まれて来鳴

きとよもし 橘の 花を居散らし (9・一七五五)

ほととぎす 花橘の 枝に居て 鳴きとよもせば 花は散り

つつ (10・一九五〇)

ほととぎす 来居も鳴かぬか 我がやどの 花橘の 地に散

らむ見む (10・一九五四)

明日の日の 布勢の浦回の 藤波に けだし来鳴かず 散ら

してむかも (一に頭に云ふ「ほととぎす」) (18・四〇四三)

ほととぎす いとねたけくは 橘の 花散る時に 来鳴きと

よむる (18・四〇九二)

これらの歌々は、それが現実かどうかは別にしても、ほととぎすが花を散らす、ほととぎすは落花の頃に訪れるという類型と理解できる。そして、これらの歌にあってほととぎすは、どちらかといえば花を散らしてしまふ無料なものと表現されている。勿論、この第三首は、書持贈歌の「玉に貫く」を受け「玉と見るまで」と散った花を玉に貫くことを歌う点において、落花を讃えてはいるのだが、前掲松田論文も指摘しているようにそれは、まだ一ヶ月近く先の五月の情景であって、平城京の現況への讚美ではない。

和歌第三首は、贈歌と呼応しつつも、開花の景を飛び越して落花を歌う。そもそも家持の和歌に開花は歌われていない。やはり

この和歌第三首も序文にのつとつた形で読むべきであり、三首ともに書持に共感を促すものなのだろう。

八 むすび

以上述べてきた二人のやりとりを、以下簡単にまとめる。書持贈歌は、二首ともに「住むと来鳴かば」、「植ゑたらば」と仮定条件句を備えて仮想的な理想の景を歌う。それは贈歌の機能としては平信に近いものだった。これに対し、家持は序文において、「橙橘」の開花とほととぎすの鳴き声という書持が望む理想の景が現時点で出現していることに述べた上で、なおも「鬱結の緒」を歌によって散らすとする。書持贈歌で示された理想の景は、「鬱結の緒」を惹起させるものであった。

家持和歌第三首はその序文通りに展開する。第一首では書持第一首の「聞かぬ日なけむ」を受け「鳴かぬ日はなし」と返す。第二首も第一首同様、書持第一首を受ける。「住むと来鳴かば」という仮想は「玉貫く月と来鳴きとよむる」と現実の景として歌われる。しかし、その声は山辺でのものであり、玉貫かざる月のものであった。そして第三首は書持第二首が仮想した「棟」の存在を前提にして「玉と見るまで」散ることを想定するが、そもそもこれはあり得ない想定ではない。家持の三首はいずれも「鬱結の緒を散らさまくのみ」という序文の範疇に収まるものである。勿論、この二人は気持ちの通じあった兄弟同士だったのだという、

我々が一方的に想定した二人の関係を前提にしてよいのであれば、「こつちではもう鳴いているよ」（第一首）、「鳴いているけれど、ほととぎすのやつ、勘違いしているんだ」（第二首）、「棟があったとして、ほととぎすは玉に貫くのに丁度よいように散らしてくれよ」（第三首）と、柔らかな諧謔に落とし込んだ上で、「心を許しあう弟ならば、この気持ちを理解してくれるだろう」という理解も成り立つだろう。ただ、これは論証のしようもない。

しかし、こうした「兄弟だから成り立つ」といった一般的尺度に基づいた類推や、「この二人ならでは」といった研究者の勝手な想定に基づいて理解してはなるまい。家持歌が書持歌に対立することなく、かつ「鬱結」を散らす歌としての理解へと書持を導くのは「和歌三首」という題詞だろう。前掲芳賀論文もこうした理解を妨げるものではない。そして、『万葉集』にはこの二人のやりとりとして、

十一年己卯の夏六月、大伴宿祢家持、亡ぎにし妾を悲傷
びて作る歌一首

今よりは 秋風寒く 吹きなむを いかにかひとり 長き夜
を寝む（3・四六二）

弟大伴宿祢書持即和歌一首

長き夜を ひとりや寝むと 君が言へば 過ぎにし人の 思
ほゆらくに（3・四六三）

天平十三年の書持と家持との贈答について（三）

が残る。

当該贈答は、平信ともいえる書持贈歌に触発された家持の応答であり、その表現は「鬱結」を散らす範囲内におさまりつつ、書持に対しては「和歌」としての読みを要求するものであった。

注

- (1) 「天平十三年の書持と家持との贈答について（一）——その本文校訂」（『関西大学東西学術研究所紀要』第五十四輯 二〇二一年四月）、「天平十三年の書持と家持との贈答について（二）——17・三九一二番歌について」（『関西大学東西学術研究所紀要』第五十五輯 二〇二二年七月）
- (2) 注釈書類は通称を用いた。
- (3) それぞれの作品名は通称を基本にしたが、私に記したのもある。
- (4) 拙稿『万葉集』巻五の前半部の性質について（『万葉集研究』第三十四集 二〇一三年十月）
- (5) 「大宰の時の梅花に追和する新歌」の作者については、暫定的に通説に従った。
- (6) 拙稿「境部老麻呂の三香原新都讃歌」（『大阪府立大学百舌鳥国文』三十号 二〇二一年三月）
- (7) 「詠志を暢べざらめや」については、小野寛氏「あに志を暢べざらめや——家持の歌を作る意識」（『武蔵野文学』三十号 一九八二年十一月）、「和歌大系」、「新大系」に詳しい。
- (8) 「山（の）上」とは上代特殊仮名遣いで区別したが、なお、不明な例もある。ただし、それらの例を入れても行論に支障はない。
- (9) 落花の美しさを詠む歌と考えられるものをあえてあげれば、他に、

沫雪か はだれに降ると 見るまでに 流らへ散るは 何の
花そも (8・一四二〇 駿河采女)
ほととぎす 花橘の 枝に居て 鳴きとよもせば 花は散り
つつ (10・一九五〇)
があるが、どちらも確実ではない。

【参考文献】

- 伊藤博氏 一九六九 大伴家持 (『国文学 解釈と教材の研究』十四卷
九号) / 『万葉集の表現と方法 下』(塙書房一九七六年) に「大伴
家持の文芸観」の題にて収載
小野寛氏 一九八二 あに志を暢べざらめや―家持の歌を作る意識―
(『武蔵野文学』三十号) / 『万葉集歌人摘草』(若草書房一九九
九) 所収
小野寛氏 一九九三 大伴書持小考 (『論集上代文学』第二十集) / 『万
葉集歌人摘草』(若草書房一九九九年) 所収
北山茂夫氏 一九七一 『大伴家持』(平凡社)
佐藤隆氏 一九九二 内舍人大伴家持とホトトギス―書持の影響を中
心として (『中京大学文学部紀要』二十七卷一号) / 『大伴家持作品
論説』(おうふう一九九三年) 所収
清水克彦氏 一九九〇 家持作中の即和歌をめぐって (京都女子大学
『女子大國文』一〇八号) / 『万葉論集―石見の人麻呂他―』(世界
思想社二〇〇五年) 所収
鈴木武晴氏 一九八八 家持と書持の贈報 (『山梨英和短期大学紀要』
二十一号)
鈴木武晴氏 二〇一七 家持と書持の贈報再論―異論を超えて真実へ
― (『都留文科大学研究紀要』八十五号)
鉄野昌弘氏 一九九七 詠物歌の方法―家持と書持― (『万葉』一六三
号) / 『大伴家持「歌日誌」論考』(塙書房二〇〇七年) 所収
芳賀紀雄氏 一九九一 万葉集における「報」と「和」の問題―詩

題・書簡との関連をめぐって―(『吉井巖先生古稀記念論集 日本
古典の眺望』おうふう) / 『万葉集に於ける中国文学の受容』(塙書
房二〇〇三年) 所収
橋本四郎氏 一九七四 幫間歌人佐伯赤麻呂と娘子の歌 (『境田教授喜
寿記念』上代の文学と言語) / 『橋本四郎論文集 万葉集編』(角
川書店 一九八六年) 所収
花井しおり氏 二〇〇三 「橘」と「あふち」―家持と書持「ほととぎ
す」をめぐる贈答―(『奈良女子大学文学部研究年報』四十七号)
松田聡氏 二〇一六 家持と書持の贈答―「橘の玉貫く月」をめぐっ
て (『万葉』二二三号) / 『家持歌日記の研究』(塙書房二〇一七年)
所収

The Correspondence Between “大伴書持” and “大伴家持” in 741 (3)

MURATA Migifumi

A correspondence between “大伴書持” (Ootomo-no-Fumimochi) and “大伴家持” (Ootomo-no-Yakamochi) is noted in Volume 17 of “万葉集.” This correspondence has been discussed from the macroscopic standpoint of the political situation of “家持,” or from the microscopic standpoint of the sibling relationship with “書持” but both lack accuracy. Therefore, by exploring the common understanding of the aristocrats of the ancient Japan, the essence of this correspondence was elucidated from the aspect of “和歌.”

キーワード：家持 (Yakamochi)、書持 (Fumimochi)、天平十三年 (AD, 741)、ほととぎす (Lesser Cuckoo)